新蘭パラレルストーリー

W I S H 0 2

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新蘭パラレルストーリー

【Nコード】

N9411V

【作者名】

WISH02

【あらすじ】

私、毛利蘭。

帝丹中学に通う女子中学生。

3月11日に帝丹高校の合格発表日で出会ったある男の子に恋をした。

テーマの如くパラレルストーリーです。

原作とは話の進め方が全然違います。

パラレルが嫌いな方はbackお願いします。

合格発表日（前書き）

あらすじにも書きましたがパレルルストーリーです。
その辺はご了承を。

新一と蘭は幼馴染みではありません。

合格発表日

私、毛利蘭。帝丹中学に通う女子中学生。

今日、3月11日は私の第一志望、帝丹高校の合格発表日だ。

私は緊張しながらも自分の受験番号が掲示板に書かれてあるか探してみた。

えーと・・・120番・・・120番・・・あ、あつた！

「らん！」

「園子！」

この子は鈴木園子。私の幼馴染み。
私と同じ帝丹高校を受験したのだ。

「その様子だと受かったみたいね！おめでとう！」

「うん・・・うん。園子のおかげだよ！」

私は親友の温かい言葉で涙が溢れた。

「うん！うん！蘭の実力だよ！ほら泣かない！」

園子は私の背中をさすってくれた。

「ほら。資料貰いに行こう？」

「うん！」

園子と私は資料を取りに行くため教室に向かって走り出した。

合格発表日（後書き）

皆さんお久しぶりですね！

最近携帯の調子が悪くて小説書けませんでした（汗）

連載中の失った記憶番外編？はネタ構成中なんでもうしばらくお待ちください。

この小説も不定期更新になってしまいます。

ご了承くださいm（）m

それでは次回もお楽しみに

出会い（前書き）

ついに蘭と新一が出会うシーンです！
ではどっぴぞ

出会い

私は園子と一緒に資料を貰いに行くため教室に向かって走り出した。

えーと・・・資料が配られてる教室は1年B組。

「うわ！資料や課題で山積みだね！」

「そうだね！蘭！」

「ハー・・・未だに帝丹高校に受かったなんて信じられないよ。」

ドン！

「あ！」

私がつ持っている資料や課題が散らばってしまった。

「あ！ごめん！」

「あ！気にしないでください。」

「あ！」

「大丈夫かい？」

ぶつかつた男の子が散らばってしまった資料や課題を拾うのを手伝ってくれた。

「これで全部かな？」

「あ・・・はい！」

「じゃあな！」

その男の子は爽やかな笑顔を見せて行ってしまった。

私はあの男の子に恋をしてしまった。
初恋かな？

「蘭！大丈夫？」

園子がその声をかけてきた。

「あ！うん・・・大丈夫！」

「どこの学校から来たんだろ？うね？なんか爽やかでかっこよかった
ね！」

「うん・・・」

私はまだ顔の赤らみを残したままだった。

そして帝丹中学を卒業して帝丹高校に入学するのだった。

しかし私は高校生になって自分はこんなに成長するなんて今の私には
はまだ知る由もなかった。

出会い（後書き）

今日は二話更新出来ましたが、次回はいつになるかわかりません

気長に待っていてください！

それでは次回また会いましょう！

入学式（前書き）

小五郎と英理は別居してないという設定です！
今日も奇跡的に更新出来ました！

入学式

今日は帝丹高校の入学式だ。

あの男の子も同じ学校なのかな？

そう考えていたら胸がドキドキしてきた。

「おーい！蘭顔が赤いぞ？」

そう言っているのは私の父、毛利小五郎。

お父さんは言わずと知れた名探偵。

「大丈夫？蘭？熱でもあるの？」

そう気にしてくれたのは私の母、妃英理。

お母さんは弁護士で法廷のクイーンと呼ばれてる。

「あ！大丈夫だよ！お母さん、お父さん！気にしてくれてありがとう。熱じゃないから・・・」

私は笑顔でそう言った。

「そう？あまり無理しないでね？」

お母さんはそう言ってくれた。

「あ！もうこんな時間！早く行かなきゃ！」

私は急いで家を出た。

「おはよう！蘭！」

「おはよう！園子！」

私は笑顔で挨拶をした。

「蘭！制服似合ってるよ！」

「園子こそ似合ってるよ！」

私たちは笑い合いながら学校に向かった。

「以上で第165回帝丹高校入学式を終了します。クラスはお手持ちのクラス表でご確認してください！」

「蘭！私たち一緒のクラスだね！」

「うん！これからもよろしく！」

私は園子と一緒にクラスになれて嬉しかった。

そしてあの男の子とも一緒のクラスになれるとはまだ私は知る由もなかった。

二度目の出会い（前書き）

また更新しちゃいました！

二度目の出会い

やっぱり新しい生活にまだ慣れないな・・・

どうしよう・・・まだ入学式が終わったばかりなのに・・・高校生活大丈夫かな？

「蘭！何不安そうな顔してるのよ！蘭には笑顔が一番なんだから！」
「ありがとう・・・園子。」

「はい！静かにしてください！」
私たちの担任の先生が教室に入ってきた瞬間みんなは静かになった。

「1年B組を担当することになった武田和樹だ。教科は数学だ。よろしくな！じゃあ今クラス委員を決めるからな。誰かやりたい人いないか？」

シーン・・・

「いないみたいだな・・・じゃあ先生が勝手に決めちゃうぞ！えー・・・今年のクラス委員は毛利蘭、工藤新一。」

えー？嘘？

「ほら！毛利！早く前に出ろ！」

「あ・・・はい！」

前に出てみたら・・・

あ・・・合格発表日にあった男の子。

「今前に出てる工藤と毛利は一年間このクラスのクラス委員になった。この二人の顔すっかり覚えておくんだぞ！じゃあ今日はこれでおしまい！」
先生はそう言って教室を出ていった。

「はは・・・まさか入学式からこんな目に遭うとはな」
工藤君は苦笑いしながらそう言っている。

「まあこれからよろしくな毛利さん？」

工藤君は私に笑顔を向けてそう言った。

私はその笑顔に釘付けになってしまった。

「あ・・・はい！よろしくお願いします！」

「工藤行くぞ！」

「おう！」

工藤君は教室を出ていった。

自分でもわかるぐらい今顔が真っ赤になってる。

ドキドキドキドキ

自己紹介（前書き）

駄文ですが見てやってください（汗）

自己紹介

入学式からもう一週間が経った。

私はまだ学校生活に慣れてないままだった。

そんな日の朝、工藤君と一緒に学校行こうって誘ってきてくれた。

「……………」

私たちはずっと黙ったままだった。

沈黙が痛い。

「あ……詳しい自己紹介まだだったね？」

工藤君がやつと喋ってくれた。

「俺、工藤新一。一応高校生探偵なんだぜ！」

「へえ……工藤君って探偵なんだ。かっこいい……」

私がそう言ったら工藤君の顔は赤くなっていた。

「私は毛利蘭。中学の頃から趣味で空手をしているの。」

「へえ……か、空手!？」

「うん……変？」

「いや変じゃないけど……」

「で？毛利さんは帝丹高校で何か部活やるの？」

「まだわからない……」

「ふーん……」

「工藤君は？」

「俺？俺はサッカー部に入部しようと思ってる。」

「へえ……頑張ってる」

私は笑顔でそう言った。

「ああ……」

工藤君はまた顔を赤くしてそっぽを向いた。

「ああー！？遅刻しちゃうよ！早く行こう。」

「ああ……」

私たちは手を繋いで学校に向かって走り出した。

手を繋げたのは嬉しいが裏腹に恋人でもないのに手を繋いでいいのかっと思った。

そのあと手を繋いだまま学校に行った私と工藤君は園子や先生にか
らかわれたっというのは言うまでもない

自己紹介（後書き）

感想お待ちしています

批判(前書き)

短いです。

すみません m (|) m

批判

工藤君と毛利さんが学校まで手を繋いで来たのを見て私たちは怒りに震えている。

そしてさらに毛利さんが工藤君に笑顔を向けているし、工藤君は顔赤くしてるし、ムカつくー！

「何よ！あの女！私たちの工藤君を独り占めして許せない！」

「うん！絶対許せない！」

「どうする？このままだと工藤君あの女に取られちゃうよ！」

「あら・・・そんなに毛利さんに工藤君が取られなくなかったら嫌味とか言っているだけじゃなくて少しは努力すれば？」

「何よ？あんたには関係ないでしょ！首突っ込まないでくれる？」

「自分に自信がないんだ？」

ムカつくー！この女！

「私は宮野志保。以後お見知りおきを・・・」

そう言って彼女は去って行った。

批判（後書き）

次回は更新いつになるかわかりません。

英検や定期テストの勉強で忙しくなるかもしれませんのでご了承ください
「」 m 「」 m

忠告

私は毛利さんに嫌みを言っている子たちに一言言ってから毛利さんがいる方向かった。

「毛利さん……ちょっといいかしら？」

「あ……はい！いいですよ！」

私は毛利さんと二人きりになるため教室を出た。

「あ……あの私に何か用ですか？」

「あ……ごめん。自己紹介がまだだったわね。私は宮野志保。化学部に所属してるわ。」

私は軽く自己紹介をした。

「私は毛利蘭。趣味で空手をしています！」

毛利さんも軽く自己紹介をした。

「で？私に何か用ですか？」

「ええ……あなた最近クラスの女子から冷たい目で見られてない？」

「冷たい目？見られてないよ！」

「ハアー」

私は毛利さんの鈍さに呆れて思わず溜め息をついてしまった。

「え？何？」

「ちょっと聞いていいかしら？あなた工藤君のこと好きでしょ？」

「え……？」

毛利さんは私の質問で顔を赤くした。

「うん……」

「やっぱりね！」

「わかってたの？」

「毛利さんを見てればすぐ分かるわよ！」

毛利さんはまた顔を赤くした。

「で？何？それを聞きにきただけ？」

「あともう一つ……毛利さんあなたはなぜクラスの女子たちから冷たい目で見られてるかわかる？」

「え？なぜって言われても……」

『ハアー』

私は今度は心の中で溜め息をついてしまった。

「なぜ冷たい目で見られてるかって言うとあなたが工藤君のこと好きだからよ！」

「へ？それだけで？」

「誰だつて好きな人を取られたら嫌でしょ？」

「うん……」

「それにみんな嫉妬してるだけよ！」

「そうなの？」

「最後に忠告しとくわ！工藤君が他の女子たちに取られたくなかったら早く告白することね！」

「ええー！？」

毛利さんが驚いているのを確認してから私は不敵な笑みを残して教室に戻っていった。

新一の好きな人

私の頭の中では授業中でも宮野さんの言葉がぐるぐる回りだしていた。

『他の女子たちに工藤君が取られたくなかったら早く告白することね!』

私の顔は自分でもわかるくらい赤かった。

「おい！毛利！顔が赤いぞ！熱でもあるのか？」
先生の声で私は我に返った。

恥ずかしいー！みんなに見られてるよー！
私はいまだに顔を赤くしたまま俯いていた。

「毛利さん？大丈夫？無理しちゃいけないよ」
そう優しく声をかけてくれたのは工藤君だった。

「あ・・・大丈夫。気にしないで・・・」
私は工藤君に心配をかけたくないから笑顔をつくってそう言った。

そしてあつという間に今日の午前中の授業は終わってしまった。

「工藤君話があるの。今すぐに屋上に来てくれない？」

「ああ。いいけど・・・」

工藤君はクラスの他の女子にそう言われて屋上に行ってしまった。

あれ・・・工藤君がちょっとクラスの女子に屋上に連れていかれただけで胸が痛くなってくる。
何だろう？この気持ち・・・
モヤモヤするよ・・・

「蘭。行かなくていいの？」

「え？」

「工藤君奪われちゃうよ？」

「べ、別に私は工藤君のことなんて・・・」

私はそう言っている割にはいまだにモヤモヤする。
言ってることと私の気持ち全然違うじゃない！

私が暗い顔をしているのを見て園子は

「ほら。蘭行くよ！」

そう言っって私の手を掴んで屋上に向かった。

「屋上」

「好きです！工藤君のことが・・・」

「・・・」

工藤君と告白している女子を見るとさらに胸が痛くなってきた。

「工藤君・・・？」

告白している女子が工藤君に声をかけている。

その声に工藤君は我に返ったみたいだ。

「あ・・・悪いな。俺は君とは付き合えない。」

その言葉でその女子は大きな声を出した。

「な、何でよ!？」

「俺。好きなやつがいるんだ。」

「・・・」

「その子といると何か俺幸せになれるんだよ。だから君やその子以外の女の子とは付き合っ気はないから・・・」

工藤君はそう言った。

あ！ヤバッ！工藤君が来る。

私と園子は急いで教室に戻った。

「良かったね！蘭！あの子とは付き合っ気はないみたいだよ！」

それは嬉しいが最後に工藤君が言っただ好きな女の子一体誰なんだろう？

新一の好きな人(後書き)

感想どうかくださいm()
m

蘭の好きな人（前書き）

また更新できました！

これから毎日の学校帰りに小説執筆して出来れば更新していきます！

蘭の好きな人

これは俺が毛利さん以外の女の子から告白されて3日後の昼休みの話だ。

「おーい！工藤！毛利さんが他の男に屋上に連れていかれたぞ！」
「なーに!？」

俺は思わず大声を出してしまった。

「告白でもされるんじゃないかねえのか？早く行ったほうがいんじゃないかねえか？工藤？」

「お、俺は別に・・・」

「何言ってるんだよ？お前毛利さんのこと好きなんだろ？早く行けよ！早く行かないと取られちゃうぜ？」

俺はその言葉を聞いて屋上に向かって走り出した。

「屋上」

「好きだ！毛利のことが！」

「・・・」

「毛利？」

「あ・・・ごめんなさい！私あなたとはお付き合い出来ません！」
「な、何でだよ!？」

「好きな人がいるんです・・・」
「・・・」

「優しくて思いやりがあつてかつこよくて、そしてサッカーがとてもうまくて探偵もしていて推理をするところがかつこよくて・・・
そしてクラスも一緒・・・私その人以外付き合う気はありません！」

「……………」

毛利さんはそう言って教室に戻ろうとした。

ヤベっ！毛利さんが戻ってくる！

俺は急いで教室に戻っていった。

―教室―

「どうだった？工藤？毛利さん告白されていたか？」

「されていた……」

「やっぱりな！俺の思っていた通り！で？毛利さんは付き合ってた
言ってたの？」

「付き合う気はないって言ってた。」

「ちえ！工藤君の悔しがる顔見たかったのによ！」

俺はそんな言葉も耳に入らなかった。

毛利さんが最後に言っていた言葉が気になるからだ。

『優しくて思いやりがあつてかつこよくてそしてサッカーがとて
うまくて、探偵をしていて推理をするところがかつこよくてそして
クラスも一緒……そんな人が好きなの！だから私その人以外と付
き合う気はありません！』

頭の中で毛利さんの言葉がぐるぐる回っていた。

付き合う気はないって返事をしていたのは嬉しいが、毛利さんが言
つてた好きな人は一体誰なんだろう？

授業中も上の空でそう考えていたがまさかその日にそんな話があっ
たなんてこの時は夢にも思っていなかった。

まさかの展開？（前書き）

作者sideです

まさかの展開？

新一以外の男の名前は山田健一。

彼は入学当時から蘭が好きだったみたいだ。

蘭を屋上に呼び出して告白した日にはあれだけの話では終わってはいなかった。その時、新一はもう教室に戻っていたため蘭が返事をした以降の話は知らない。

「私・・・その人以外と付き合う気はありません！」

蘭はそう言つて屋上から教室に戻ろうとしたら告白した男が蘭の腕を無理やり掴み逃がさないようにした。

「知ってるよ・・・工藤だろ？」

「そうです！私は工藤君以外好きになれません！付き合えません！」

「でもさ・・・工藤のこと好きなのは知ってるけどさ俺のこと全く知らないまま振るのは失礼じゃないか？」

いきなり何を言い出すんだ？この人は？と蘭は心の中で思った。

そう思っていた蘭だったが蘭は自分の思っていることを口にだした。

「あなたにとつては失礼なことかもしれないかもしれませんが私は工藤君以外の人のことは知らなくていいんです！それじゃあさようなら」

蘭はそう言つて屋上から教室に戻ろうとした。

「とりあえず明日一緒に帰ろうよ！明日校門の前で待ってるから」

蘭の耳には聞こえていたが蘭は聞こえないフリをして教室に戻っていった。

まさかの展開？（後書き）

今日も学校帰りに更新出来ました。
明日も出来れば更新します

しつこいお誘い(前書き)

まか作者sideです！

多分次回まで作者sideが続きます！

しつこい誘い

「とりあえず明日一緒に帰ろうよ！明日校門の前で待ってるから！」
昨日の昼休みに山田が自分にそう言っていたのを思い出している蘭は昨日の午後の授業や今日の授業はまるっきり集中出来なかった。そしてあつという間にもう帰る時間が来てしまった。

ホームルームが終わったあと蘭は急いで教室を飛び出した。

山田とは一緒に帰りたくないからだ。

新一以外とは帰ったりするのも嫌なみたいだ。

あいにくD組はホームルームをやっているみたいなので山田はまだD組の教室にいるみたいだ。

蘭は急いで校門を出て帰ろうとした。

その時

「毛利！早かったな！」

「う、嘘？D組はまだホームルームをしているんじゃない？」

蘭はまだホームルームをしているはずのD組の山田が校門の前にいるのを見て驚きを隠せない。

「いやーこんなこともあるかと思ってホームルームさぼってきたんだよ！さぼってきて正解だったな！だって約束したもんな？毛利と今日一緒に帰るって！」

「約束なんかしてません！」

「俺喉渴いたな・・・そこらへんに新しく出来たばかりの喫茶店があるみたいなんだよ。毛利が好きそうな喫茶店だぜ！かわいい店みたいだぜ！」

そんな言葉を聞いて蘭は思った。

帰るときも工藤君以外の人とは帰りたくない！

その喫茶店に行くのも工藤君以外の人とは行きたくない！

「じゃあ行くのか？」

山田はそんな蘭の気持ちにも気付かず蘭の手を握り走り出した。

「な！ちよつと！行かないって言ってるでしょ！離して！」

そう言つて力を入れるがさすがに空手をやっている蘭の力でも男の力には敵わない。

一人で帰りたくても帰れない状態だ。

こんな毎日が続いていて蘭も嫌になってきた。

そして一週間後の月曜日の放課後に蘭は山田となぜか一緒に映画を見に行くつて無理やり誘われてしまった。

蘭は何度も行かないつて断つたが山田は懲りもせず蘭が校門にくるのを待ちかまえて結局蘭と一緒に映画を見に行くことになってしまった。

―映画館―

映画館に着いてから蘭は嫌な気持ちでいっぱいだった。

何で好きでもない人と映画なんて見なきゃいけないんだ……

蘭は耐えきれなくなり、山田が二人分の映画のチケットを買っているときに映画館を出ようとしたその時

「どこ行くつもりだよ？」

！！

蘭は驚きを隠せなかった。

チケットを買っていたはずの山田が先回りして蘭が逃げるのを防いでいたなんて……

「そんなに俺と一緒にいると嫌か？」

「嫌です！」

「何でだよ？」

「前も言っただけど工藤君のこと好きだから・・・」

「何で俺じゃなくて工藤が好きなんだよ？」

「工藤君だから好きなの！工藤君以外私好きになれない！」

「何でだよ？」

その声と共に私は壁に頭を打ち付けられた。

「痛っ！」

私はあまりの痛み顔に顔をしかめた。

「そんなにあいつが好きなのかよ？なあ？何でだよ？」

山田君怒ってる？

蘭は今の山田が一週間前の山田とはとても思えず怖くて山田を押して映画館から逃げ出した。

しつこいお誘い（後書き）

感想ください m（
感想お待ちしてます

ピ、ピンチ！？（前書き）

作者sideです！

作者sideは多分次回まで続きます！

ピ、ピンチ!?

蘭が山田から逃げてからの翌日の朝、蘭の目は赤くなっていた。恐らくずっと泣いていたからだ。

そしてもう学校に行く時間になってしまった。

蘭は山田とは会いたくないから急いで学校に向かって走り出した。なんとか山田とは会わずに教室に入れた。

蘭はほっとした。

しかし放課後にまた山田に会うとは蘭はまだ思いもしなかった。

蘭は園子と楽しそうにおしゃべりをしながら校門を出ようとしたその時……

「あ……毛利!」

またもやここで山田に声をかけられてしまった。

蘭はいい加減にしてって言いたくなってきた。

「ちょっと話があるけどいいよな?」

断つてもまたしつこく付きまとうてくるだろうと蘭は悟った。

「園子悪いんだけど先に帰ってくれる?」

蘭は無理やり笑顔をつくってそう言っただけで蘭と山田は体育館裏に行っってしまった。

―体育館裏―

「昨日はごめん……」

山田が昨日蘭にしたことについて謝ってきた。

「うん……」

「俺さ……本当に毛利が好きなんだ。工藤のことが好きな毛利を

見てると嫌なんだ。だから付き合ってくれないか？」

「山田君の気持ちは嬉しいよ・・・」

蘭がそう言つと山田は嬉しそうな顔をして蘭を見た。

「でもね・・・前も言つたけど私は工藤君以外好きになれないの！」

「じゃあ工藤みたになれば好きになつてくれるんだな？」

何度言つてもこの男はわからないようだ・・・

「工藤みたいにサッカーも推理も出来てそれで優しくなつてればいいんだな？」

「だから私はあなたがもし工藤君みたになつても私は工藤君以外とは付き合つ気はありません！」

「じゃあ・・・じゃあ俺の気持ちはどうすればいいんだよ？」

山田はそう言つて蘭に顔を近づけてきた。

山田が蘭の腕を掴みいきなり顔を近づけてきたきたから蘭は何をしでくるかわかつていた。

キ、キスされる！嫌！好きな人以外とキスするなんて絶対嫌！

蘭は怖くて足も体も震えてきて得意の空手も使えない。

蘭の目には涙が流れていた。

ピ、ピンチ！？（後書き）

蘭どうなる！？

それは次回に持ち越し！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9411v/>

新蘭パラレルストーリー

2011年9月25日21時54分発行